

宮城県仙台市近郊の言語景観

—自然環境における注意喚起表示の考察—

堀田智子(宮城学院女子大学)

1. 問題の所在

言語景観 (linguistic landscape) は、「特定の領域あるいは地域の共時的・商業的表示における言語の可視性と顕著性」(Landry & Bourhis1997; 25), 「文字言語で視覚的な情報であり, 公的な場で不特定多数の読み手に対して発せられる, 自然に, あるいは受動的に視野に入る書き言葉」(磯野 2020; 14) と定義され, 近年, 社会言語学や経済言語学の観点から注目が集まっている。磯野 (2020) によると, 言語景観は, 公共表示と民間表示に分けられる。前者は空港や駅などの公共施設や公共利用物にある商用ではない表示であり, 後者は店舗や企業広告などの商用表示である。

国内における日本語言語景観研究では, 公共表示・民間表示に関わらず, 観光の観点から特定地域における多言語表記 (田中ら, 2012; 加藤好崇, 2015; 西郡ら, 2016), 方言景観の特徴 (加藤和夫, 2022; ロング・斎藤, 2022) を考察した研究が盛んに行われている。多文化共生社会の観点からは, 非日本語母語話者のみる言語景観 (ロング, 2014; 本田ら, 2017) や日本語教育への応用を視野に入れた研究 (磯野, 2021) も行われている。

本研究で注目する注意喚起表現は, 日常生活の至るところで観察されるものであるが, 語用論の特徴が現れやすく, メッセージの送り手と双方向的なやりとりができない (ロング, 2014) ことから, 非日本語母語話者が正確に速やかに理解することは容易ではない。

仙台市は, 自然豊かな東北地方の中核都市であり, 近年は在留外国人も増加傾向¹にある。留学生はもとより, 就労を目的とする在留外国人も多く, 週末にはあちらこちらで自然と親しむ人々の姿が見受けられる。本研究では, 仙台市近郊の自然環境における注意喚起表示の実態を観察し, 地域住民が自然と共生しながら安心した暮らしをするための課題を考察した。

2. 調査の概要

調査は, 2023 年 8 月に実施した。実施地域を図 1 に示す。主に, 太平洋に注ぐ名取川の河口部と, その支流である広瀬川の中流域である。広瀬川は, 仙台市内を貫流しており, 中流域には自然豊かな市街地が広がっている。調査地①は, 仙台空港から近い, 名取川河口部の閑上地区である。2011 年 3 月に発生した東日本大震災の甚大な被害を受けたが, 2021 年に河川防災ステーションが整備されるなど, 交流人口が拡大している (高橋 2022)。調査地②は, 仙台駅から 3km に位置する広瀬川の河川敷である。遊歩道や公園が整備されており, 平日休日を問わず, 多くの人々が訪れる憩いの場である。調査地③は, ②から 1km 程度の, 住宅街の風致公園である。調査地④は仙台都心から約 20km 離れた秋保温泉の入り口である。名取川に沿って遊歩道が整備され, 国内外からの観光客が多い。

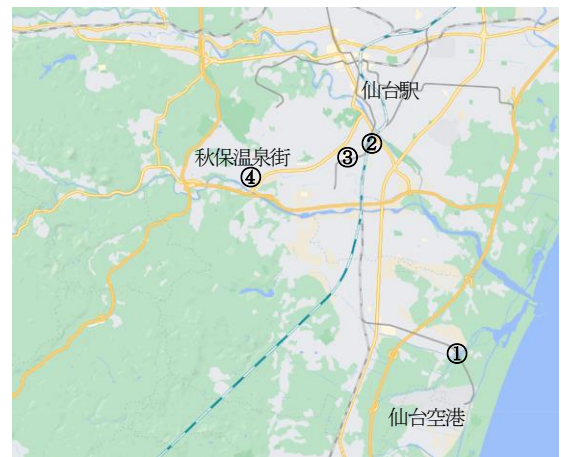


図1 調査地

¹ ロング (2014) では, 直接的働きかけと間接的働きかけの 2 つに大別している。前者は①依頼型、②要請型、③テ形型、④形式名詞型、⑤否定形の断定型、⑥勧誘型、⑦動詞省略型、⑧命令・禁止形、⑨名詞止め文型 (直接) の 9 つに、後者は①陳述型、②予測型、③警告型、④名詞止め文型 (間接)、④質問・呼びかけ型の 5 つに、それぞれ下位分類をしている。

² 2023 年 4 月時点での人口は約 110 万人、そのうち在留外国人は約 1 万 5000 人である (いずれも仙台市 HP より)

データとなる撮影対象物は、歩道から、または河川敷や公園内で視認できる公共表示のうち、津波や洪水といった自然災害に関するものと野生動物に関わる注意喚起を示す看板である。

3. 結果と考察

以下では、調査地①から調査地④で観察した看板の特徴について、順に述べる。

調査地①は、名取川河口部であり、先述のように、東日本大震災からの復興まちづくりが進められている。車道にはもちろん、公民館や学校などの公共建物には、国土交通省の定める「災害種別避難誘導標識システム (JIS Z9098)」の津波避難情報標識が設置されていた。写真1は、避難マップである。右側には「震災の教訓を伝えるまち 名取 津波からの避難はより高く、より遠く」というメッセージと、「ここは津波浸水深 3.4m」という表記がピクトグラムとともに示されていた。写真2は、指定避難所である公民館に設置されている看板である。2階建ての建物の外壁には、津波避難ビルの標識が掲げられており、周辺地域から判読しやすかった。指定避難所の看板には、避難場所や避難所、自身、津波、洪水、地盤の高さが、ピクトグラム、振り仮名付きの漢字、英語で表記されていた。緊急時対応はもちろん、平時の注意喚起にも役立つことであろう。



写真1 避難マップ



写真2 指定避難場所

写真3には、「この地盤は海拔2m」と、振り仮名付きの漢字、ひらがな、アラビア数字で表記されている。写真4には、「東日本大震災 2011. 3. 11 津波浸水深ここまで」と、ピクトグラム、漢字とひらがなで表示されている。これらは、津波被害を後世に伝え、記憶を風化させないという点では大きな効果が期待できる。しかし岩田 (2017) が指摘するように、写真3に示された「海拔2m」が安全なのか危険なのかを知る人は限られるだろう。この看板を頼りに、震災の経験のない人々、特に内陸部で育った非母語話者を、緊急時に適切な避難行動へと導くことができるかについては、疑問が残った。



写真3 海拔表示



写真4 津波浸水深表示

調査地②の河川敷では、ダム放流に関する看板が複数観察された。全ての看板に増水時の注意がイラストとともに記されていた。写真5は、その一例である。最上部に「ダムの放流による増水に注意」とあり、順に説明が書かれている。その内容とは、上流にあるダムの名称、時々行われる放流に伴う急な増水に対する注意、具体的な注意説明、サイレンの鳴らし方である。最下部には、管理事務所の連絡先が書かれている。

いずれも、振り仮名付き漢字、ひらがな、カタカナが使用され、「注意」「赤色ランプ」は赤字表記である。また、敬体、「～てください。」と難易度の低い文法が用いられており、読み手への一定の配慮が感じられる看板である。しかし、緊急時の安全確保促進という点では十分な効果を発揮できない恐れがある。ダムが放流される「ときどき」が具体的にいつなのか(説明2)、重要キーワードである「サイレン」や「赤色ランプ」が何を指すのか(説明3と説明4)、「サイレン塔」がどこにあるのか(説明4)といったことを、この看板から正しく読み取ることは難しい。また、説明1から順に読み進めると、何に「注意」するのか(説明2)、「その時」がいつなのか(説明3)を、正確に速く理解することは容易ではない。ピクトグラムを付記する、説明をより分かりやすくする、などの工夫が必要であろう。

調査地③の風致公園は、仙台市中心部の交通量の多い住宅街にあるが、近年は熊の目撃情報がある。アーバンベアとも呼ばれる熊は、生活区域を広げ、市街地に一時的に出没するなど、市民生活を脅かす存在となっている。写真6と写真7は、同じ公園内で撮影したもので、前者は自治体による、後者はNPO団体による設置である。写真6では、「くまの目撃情報がありました。十分ご注意ください」と、ひらがなと漢字表記で熊の目撃情報を知らせ、注意を促している。最下部には、連絡先も書かれている。「目撃」は、日本語能力試験の級外に相当する語であり、振り仮名も付けられていないため、非漢字圏出身者にとってはどのような「情報」があったのか理解することは難しい。また、「いつ」「どのように」「何に」「注意」しなければならないのか、について具体的な説明がないため、日本語母語話者であっても専門的知識がない限り、緊急時に適切な行動をとることは難しいだろう。写真7では、「クマがいます TSUKINOWA-GUMA あなたのやさしい行動と鋭い気づきがクマとのニアミスやトラブルを回避します CONTROL & MANAGE HUMAN」と、漢字、ひらがな、カタカナ、ローマ字、英語で表記され、愛らしいイラストも掲示されていた。熊のイラストから、日本語非母語話者であっても熊の存在を知ることができる。しかし、「やさしい行動」と「鋭い気づき」が具体的に何を指すのか不明瞭である。また英語母語話者であっても、“CONTROL & MANAGE HUMAN”(人間を調整し、管理する)というメッセージの意図を正確に理解できる人は多くないだろう。



写真5 川の増水時の注意

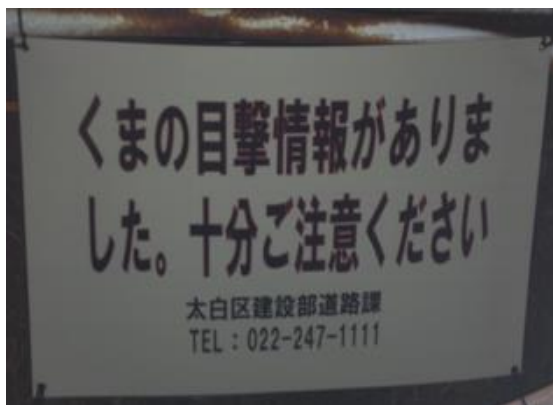


写真6 熊に対する注意その1



写真7 熊に対する注意その2

調査地④は、国内外からの観光客が多い地域である。写真8では、「ツキノワグマ カモシカ の生活エリアです やさしい気配りを忘れずに！」と、野生動物の存在を、ひらがな、カタカナ、漢字で知らせる、優しい色調の看板である。最下部の「忘れずに！」は、日常生活で頻繁に使用される注意喚起表現であるが、「忘れないようにしましょう！」と同義であることを容易に理解できる非母語話者は多くないだろう。また、写真7と同様に、ツキノワグマとカモシカの「生活エリア」において、どのような「気配り」が必要なのかを知る母語話者も多くないだろう。



写真8 熊に対する注意その3

以上をまとめると、東日本大震災の甚大な影響を受けた沿岸部では、メッセージを明確に伝える、統一された表示が整備されていた。それに対し中流域では、表記が多種多様であり、特に野生動物に関する表記の多くは熊の存在や目撃情報など、情報提供にとどまっていた。これらは、掲示物を見た人々に対して、設置者の意図を正しく瞬時に理解する能力、つまり語用論的理解力を求める標識と言える。どの標識も、その存在自体が被害予防に有益である。野生動物との共存は検討すべき課題の一つであるが、熊遭遇回避の方法や、遭遇時や事故発生時の具体的な対処法の表示がなければ、日本語母語話者であっても適切な行動をとることは難しい。看板の表記スペースは限られるが、目にした人々が安心して自然に親しめるように、更なる工夫が必要であろう。

4. おわりに

本研究では、仙台市近郊の自然環境にみられる言語景観を検討した。分析の結果、沿川市街地には、母語を問わず語用論的理解能力が求められる注意喚起表示が多いことが明らかになった。これらは、ロング (2022) が指摘するように、多文化共生社会における言語景観づくりの検討や日本語教育現場での扱いを検討する必要性を示唆するものである。

参考文献

- ロング, ダニエル (2014). 非母語話者からみた日本語の看板の語用論的問題: 日本語教育における「言語景観」の応用 人文学報, 488, 1-22.
- ロング, ダニエル・斎藤敬太 (2022) 言語景観から考える日本の言語環境 方言・多言語・日本語教育 春風社
- 本田弘之・岩田一成・倉林秀男 (2017). 街の公共サインを点検する 大修館書店
- 加藤和夫 (2022). 北陸地方における方言景観の特徴 国際文化, 4, 21-37.
- 加藤好崇 (2015). 箱根地区における外国人観光客の言語問題と多言語表記 第1部 問題調整としての多言語表記分析の枠組み—和式旅館の多言語表記「貼り紙」の分析— 東海大学日本語教育学論集, 2, 1-17.
- Landry, R. & Bourhis, R. Y. (1997). Linguistic landscape and ethnolinguistic vitality: An empirical study. *Journal of Language and Social Psychology*, 16 (1), 23-49.
- 西郡仁朗・黒田史彦・福田寺紫陽・市川紘子 (2016). 東京の言語景観と留学生から見た多言語対応状況—2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて— 人文学報, 512 (7), 39-60.
- 一般社団法人日本標識工業会 「災害種別避難誘導標識システム」 JIS Z 9098 防災標識ガイドブック https://www.bousai.go.jp/kyoiku/zukigo/pdf/symbol_02.pdf (2023年10月1日閲覧)
- 磯野英治 (2020). 言語景観から学ぶ日本語 大修館書店
- 磯野英治 (2021). 多文化社会への支援に資する言語景観を活用した初級日本語教育教材開発のための基礎的調査 日本語研究, 41, 57-68.
- 仙台市の推計人口及び人口動態 <https://www.city.sendai.jp/chosatoke/shise/toke/jinko/suike.html> (2023年12月28日閲覧)
- 仙台市の外国人住民数について <https://www.city.sendai.jp/koryu/shise/gaiyo/profile/koryu/r5/20230501tokei.html> (2023年12月28日閲覧)
- 高橋航 (2022). 「閉上地区かわまちづくり」による復興と地域活性化 月刊「建航」, 66, 15-17.
- 田中ゆかり・早川洋平・富田悠・林直樹 (2012). 街のなりたちと言語景観 —東京・秋葉原を事例として— 言語研究, 142, 155-170.